
灰原哀による調査報告書

mine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰原哀による調査報告書

【Nコード】

N7011R

【作者名】

mine

【あらすじ】

私、灰原哀。この作品は、私が『名探偵コナン』内に出て来る様々な人物、出来事etc...について、「私なりに」調査した過程と結果をまとめたものよ...まあ、よろしくね？

追記

下らない案しか出せない筆者の為に、感想で「調査してほしい」内容を、コメントしてくれると嬉しいわ...全部は難しいけど、こちらもよろしく願いするわね。

ちなみに、感想返信も私がするわ。

調査 1 - 1 (前書き)

この小説は、私にしては珍しくシリアス面がほとんどありません。
軽い気分で読んでみて下さい (笑)

調査 1 - 1

白鳥任三郎…彼は、国家公務員Ⅰ種試験合格を経て警察庁入庁した、いわゆる「キャリア組」の警部。

捜査能力などは、一課内でも上位に当たり、珍しく目暮警部にもほとんど怒鳴られる事の無い人。少なくとも、群馬県警のヘッポコ警部と同じ階級だとは思えないわ…

けど、この前…そんな彼には、新たな恋があつたみたい。

佐藤さんの事をずっと一途に思ってたらしいけど…相手は、小林先生。

—これは、そんな彼の…夏休み中の小林先生へのアタックの履歴を
探る、調査報告書である—

報告書 1：白鳥任三郎は、夏休みの間…小林先生へのどのくらいアタックを仕掛けたか？

「…あんた、記念すべき第一回にこれ書くの？」

「…ダメでしょうか？」

「…構わないけど。」

仕方ない…断ると、本当に何も書かなくなりそうだから…仕方なく調査するわ。

~~~~~

まずは、彼女の携帯の履歴を確認ね…夏休みの始まり頃に、白鳥警部があなたに電話を掛けたのは確認したけど…

（ちなみに、今日は夏休み明け、3日目よ。）

でも、どうやればいいのかしら？流石に彼女に無断で、こっそりと調べるのは私に残る僅かな良心が咎めるし…

…あら、丁度良い所に彼が…

「ねえ、江戸川君。」

「ん？どうした、灰原？」

（交渉中）

「で、お願い出来るかしら？」  
「いや…流石にそれは…」

ちっ…この役立たずめ…

～脅迫中～

「…それじゃあ、行くか。」  
「そうね。」

作戦、成功。

さてと…小林先生は…

―白鳥警部と電話…最高のタイミングね。

ピッ

「小林先生。」

「な、何!？」

驚かないの…これからよ?本当の意味で驚くのは…

「やつぱり…白鳥警部と電話してたのかしら?」

携帯を、机の上へと置く…無防備。

「え、ええ…そうだけど…」

「それで?…まだ、告られてないの?」(今よ…江戸川君!)

モジモジしている小林先生にバレない様に、こっそりと携帯を狙う  
江戸川君…

―しかし。

「ダメよ!!コナン君!!人の物に手を触れる悪い癖…はあっ!!」

あら…何か、小林先生のキャラが…え?初期小林先生?誰かしら、  
それ?

「くっ…」

ピシュッ！

…何やってるのよ。

「…工藤君？」

「あ、いや…ワリィ…思わず、打っちゃった…」

「まったく…麻酔銃撃ち込んだら…この後、どうやって彼女は授業するのよ…しばらく起きないじゃない…」

「でも、大丈夫。起こしたい時になったら、これで起こせっから…」  
「あら、博士の新しい発明品みたいね…って！ただの金属棒じゃない！！」

「そんな下らない物作ってないで、さっさと2、3本麻酔銃が撃てるように改造したらどうなの！？このメタボ…あら？」

…この匂い。

「ねえ、江戸川君。今朝、博士から受け取ったのよね？」

「あ、ああ…そうだけど…」

「ふふっ…博士。後で…極刑ね。」

「さてと…それより、履歴をチェックしようぜ。」

ピッ  
...

「  
」  
.....  
「  
」

これを見たから...調査は、1回じゃ終わらなくなったわ。  
ますます...工藤君とはまるで違う意味で、魅力的な興味深い素材ね  
...白鳥警部。

## 調査 1 - 2

さて、ここは…警視庁前。

勿論、何の為にここに来たかは…言うまでもないわよね？  
そう！白鳥警部に…質問する為よ。

「あれ…哀ちゃんじゃないか。どうかしたのかい？」

あら…幸運ね。『いつもはダメ刑事を装っておきながら重要局面は確実に逃さずに何か大きい事をしでかしてくれるスーパ―刑事』  
…別に、スーパ―刑事でもないけど。山村「警部」よりは役に立ってるんじゃないかしら？爆弾事件の時も、何だか佐藤刑事に言っただけだし…

…つと、それより早く言わないと…

「ねえ、高木刑事。白鳥警部に会いに来ただけども…」

「へえ、白鳥さん、ねえ…」

さてと…この流れになれば、いつもは『僕に何か用かな？』って、彼現れるんだけど…

「僕に何か用かな？」

はい、ビンゴ。

「し、白鳥さん……」

「それより、高木君。美和子さんが呼んでいたが……」

「そ、そうですか。それじゃあ、哀ちゃん、また。」

「ええ……さて、白鳥警部。」

私は、白鳥警部の方に向き直る……

「そうか、君か。用があるのは……」

そうよ。それじゃあ……色々聞かせてもらっわね？

「そうよ……まず、一つ目。あなた……」

「哀ちゃん、質問中です」

「こんな所かな？」

「ええ……十分よ。お陰で、良い報告書が書けそうだわ……」

「報告書？」

まあ…いいか。どうせ後々バレる事だし…

「そうよ。」

「…まさか、皆に見せるのかい？」

「ええ…」

あら…意外と意気地なし？

むしろあなたなら、関係をもっと見せびらかすと思ったけど…

「…それならば、少年探偵団、灰原哀団員。」

何よ…いきなりかしこまっちゃって…って、いつも結構かしこまっちゃってる方でしょうけど。

「もっと、もっと過激な内容にしてくれたまえ！！私と、小林先生の関係が―全世界中に伝わるような、そんな報告書に！！」

―無理よ。報告書じゃ…新聞に載せるんじゃないし…

そして―

「下らない。」

「な、何を言うんだ！頼む！！この通りだあ！！」

警視庁前で、小学１年生に対して土下座で物を頼む、３０代半ばの男性…馬鹿みたい。

まあ、そのお願いに応じて…ふふっ…

「哀ちゃん、強制尋問中です」

「はあ、はあ……もう……いいかい？」  
「……いいわよ。もう少し続けてあげる……」  
「ひいいい……」

「哀ちゃん、強制尋問中です」

「ありがとう。いいデータが取れたわ…」

そのまま、放っておいたら…皆の笑い者になってたわ。最高ね…

それじゃ、次回…「報告書1」、お楽しみに。

## 報告書1「白鳥警部の恋」(前書き)

NEWS「先ほど、東京西部において、某中学生が、心臓を撃たれた状態で発見され、病院へ搬送されましたが間もなく死亡しました。『お願いだから…次はもつと早く書くから…命だけは…』という言葉を残しています。警察は、『自殺』という事で事件を片付ける方針です。」

ピッ…

コナン「…何やってんだよ。警察。」

哀「ざまあみなさい…もう出来掛けなのに、放っておくからこうなるのよ…」

コナン「何か言ったか？灰原？」

哀「別に…」

静かに、灰原は拳銃をベルトの更に奥に押し込んだそうなの…

—なわけないでしょうが(笑)

## 報告書1「白鳥警部の恋」

DATA：白鳥任三郎

映画に、目暮警部と共に大阪勢や高木・佐藤すら成し遂げていない15作品連続出演を果たすなど、意外に有名なキャラクター。そして、捜査一課内でも、上位クラスの判断力、知識は目暮警部にも頼りにされるほどの物。（というより、レギュラーメンバーの刑事の中では一番かもしれない。少なくとも群馬県警のヘッポコと一緒に（ry

彼の将来の夢を弁護士↓警察官としたのが、少年時代の佐藤美和子らしい女性の一言である。

しかし、高木・佐藤は必死の白鳥軍団、改め「佐藤美和子絶対防衛ライン」を中心に、局面によっては目暮、小五郎による妨害を受けながらも、徐々に関係を進展させていく。「本庁の刑事恋物語」etc...の度に、徐々に次第に白鳥も焦りを見せ始めていた。

そして、その姿勢は生牡蠣、改め生ガキ2人にも批判される。映画館に偶然来ていた白鳥は少年探偵団の年齢詐称2人に対し、運命的出会いについて懐かしそうに語っていた...だが。

K君（まあ、どうせ別人だろうけど...）

Aさん（大逆転なんて無理無理...高佐ムードはもう覆らないわよ...残念だけど。）

―後に、それは的中する事となる。彼が会った運命の人物は、同様にストローの包み紙で作った花を巻いて白鳥警部に渡した「笠倉那海」...かと思わせておいて（Aさんの「新たな恋の予感...」フラグ

を、見事に跳ね返したのは称賛に値する…というか、正確には笠倉氏に自ら「彼が（ry」で引ッ繰り返された。Aさんのフラグは結構当たるのだが…この日は調子が悪かったのだろうか。詳細は不明である）、その女性は犯人で、はたまた逆転で…

1 - B 吉田歩美！！

……にそのやり方を教えていた帝丹小学校に転任してきた1 - Bの担任、小林澄子先生だったのである。  
言っておくが、彼はロリコンではない。

予想外の結末に、生ガキコンビも流石の驚きようを見せた。

K君（マジかよ…この逆転劇までは流石に推理出来なかったぜ…）

Aさん（ああ…そういうばやり方とか前の黒板に書いてた、って吉田さん言ってたわね…工藤君も私も寝てたから忘れてたわ…）

さて、そんなこんなで大逆転劇を決めた白鳥警部だったが…中々、小林先生に対して真相を言う事が出来ない…なんてもたもたしてる内に、とうとう小林先生に、一度振られてしまう。（原因は、恋愛感情の纏れby群馬県警の山さん）

…まあ、しかしどうこう言っておきながら、結局ちゃんと伝える事が出来たようだ。今は、ラブラブなお二人さん…関係の進展は、高木×佐藤よりも相当早いとか、何とか…詳しくはggr…なんでもない。

### 調査結果

7/20～8/31までの夏休みの間の、二人の様子。

7/20～7/26

1日当たり、3～4回メール。1回電話…つまり、まだろくに進展していないにも関わらず、白鳥警部は猛アタックを仕掛けていた事が分かる。

7/27…花火大会の日。この日、事件に遭った小林先生を心配して「励ましのメール、電話を連射。メール9通、電話2回…」一つも消してない事を考えると、小林先生もまんざらでもなさそう。

7/28…翌日。事情聴取の日…と同時に、小林先生がショックを受ける日。ただし、電話もメールも午前中のみ…メール6通、電話2回…で、終わってしまった。流石に空気を読んだ白鳥警部の姿が伺える。

7/29…登校日。白鳥警部は全てを明かすが…とにかく、その晩―大逆転が発生する。奇跡的…ドラマチック…その晩は白鳥警部は忙しかったらしい。

7/30…再度、小林先生の事情聴取。二人の仲が深まった…その晩、メールと電話1回ずつの形跡あり。

7/31…毎日、メール10通、電話3～5回。ラブラブな関係はもう止まらない……

#### 周辺人物の証言

Aちゃん「この前、小林先生が授業中に携帯が鳴って…焦って外に出て行つたのを見たよ!」

M君「メールが立て続けに来ていたみたいで…でも、凄く小林先生嬉しそうでした。」

G君「先生、給食の間にメール打っててよ…食べ切れなかったんだぜ?残すのは良くねえぞ!」

Mちゃん「この前、うち、質問にいったんやけど…『あつ、いけな―い!さっき電話掛かってきたんだつた!』って言って、行つてもうた…」

T君「テストの点数、採点何度も間違えられて…びっくりしたぜ。60点なんて…そんな低いはずねえもんな…直されて、55点になつて返つて来た。」

以下、高校生陣。

Rさん「保護者面談の途中に、電話が掛かってきて…あれ、白鳥警部だったみたいですね…それより、保護者面談まで私に任せるお父

さん…どういっつもりなのよ…」

Sさん「はあ…いいわよねえ…私はどうやっても上手く行かないし…」

K君（見た目は子供、頭脳は大人！その名は…）「この前…小林先生、事件に巻き込まれた時に…白鳥警部とコンビネーション組んで、事件解決したって聞いたぞ…マジかよ…」

Aさん（見た目は子供、頭脳は悪魔！その名は…）「バカップルー直線ね…」

#### 警察関係者の証言

T刑事「何だか…とんでもないスピードで進展してるみたいですね…お二人さん…」

S刑事「その頃、一方高木刑事は…」

M警部「まったく…馬鹿な事を話してるんじゃない！」（そういえば…みどりが早く帰って来いと言ってたな…）

以上

**報告書1「白鳥警部の恋」(後書き)**

アイデア募集中です。

## 調査 2 - 1

彼は、どうしていつもあんなに冷静でいられるのだろうか？

―信じられないくらい、精神こころが強すぎる。

…何度も、私は助けられた。彼の冷静な判断に…

そして、周りを危険に晒さないように…一瞬たりとも、油断しない彼の姿―凄すぎる。

…どうして、彼はこんなに…強いのだろうか？

―ま、そんな事を調査しても仕方な…

待つて。

―これなら…流石に、彼も…

私の、まだ未熟な心は…自然と、工藤君を弄ぶ事だけを考えるようになった…

数日間考え続けて、ようやくプランが固まった。  
あとは…

ブルブル…

「もしもし…ええ、ええ……はい。お願いします」

—完璧。これならば…工藤君も…

ふふっ…さあ、どう足掻いて見せる？

「調査2…工藤新一は、ドッキリを仕掛けられたらどうなるか？」

M「…ねえ、これって調査？」

哀「そうよ。だって『どうなるか？』よ？調査っていえるでしょ？」  
M「ま、まあ…」

~~~~~

朝っぱらから、灰原が可笑しい。

ちらちらと、こっちを見て来ると思えば…気付いたら、じーっと見つめてきてる。

そして、こっちが振り向いた途端に、目を逸らす。

しかも、何度も…

—だから、歩美ちゃんも睨んでくる。

（おい、灰原…）

（…何？）

（何なんだよ…さっきから。俺の顔に何か…ついてんのか？）
（……）

黙っちまって…

…待て、よ…

おい…

『女の子が男の子を見つめるのは、その子の顔に何かついてるか、その子に恋してる時って、決まってるんだから！』

…な…

あー！くそっ！

「わっ！待ってよ！コナン君！」

あいつの近くにいたら、また変な事考える！
離れてりやいいんだろ、離れてりや！

っと…そういえば、今日…父さん達帰ってくるって言ってたや…

ーでも、久々、か…

くくくくくくくくくく

ガチャ

「ただいま…」

パァン、パァン！

「お帰り〜新ちゃん！」

うつせ…クラツカーの音…

「何だよ…そんな盛大にお祝いしやがって…」

「まあまあ、いいじゃないか…新一。久しぶりの家族団欒の時間だ…今日ぐらい、ゆっくりしたって構いやしないさ…」

む…

「それより…さっき、灰原さんが呼んでたけど…」

「え？灰原が？」

「ええ…電話が掛かってきて、『夕食を食べ終わったら、家に来て欲しい』って…」

…まさか、それが言えなくて…こっちを、じろじろ見てたって言う

のか？

「あ、ああ…分かった。」

「それじゃあー今日は、久々に私が腕によりを掛けて作らせて貰うわね！」

けれどーこれは、信じられないような展開の…幕開けでしか無かった…そう知るのは、まだ先の事である…

調査2・2（前書き）

これはドッキリです。ドッキリ以外の何物でもありません。哀ちゃんの内心でニヤニヤしながらこんな台詞を発しているんだなあと妄想しながら見るのが、面白いかと。

… 1ヶ月近く放っておいて、申し訳ありませんm（――）m

調査2-2

「うつぷ…博士。」

「おお、新一……どうしたんじゃ？」

腹いっぱい食わされたんだよ。見れば分かるだろうが。

「まあ、久々で嬉しいんじゃよ…有希子君も。」

嬉しいのは誰にだって分からあ。でも、暴走するのと嬉しいのではちよつと違つぞ。

「それより…灰原が用事があるって…」

「ああ…そうじゃ。まあ、大した事じゃないと思うが…」

ま、そうだろうな…もしかして、解毒剤の試作品か？

「あら…工藤君。」

おっと、呼び主登場か。

「よお、灰原…何の用だ？」

「取り敢えず…こつち来て？」

ん？

(博士に聞かれたら困るのよ…)

(そ、そうなのか？)

(ええ…地下室まで着いてきて。)

灰原に促されるままに、俺は実験室へと連れて行かれた。

~~~~~

「で…何だよ…話って。」

「……工藤君。」

灰原は、いきなり俺の両頬に手を当てる。

「ちよっ……」

「―ねえ……もう、諦めない？」

…へ？

「……もう諦めて、何処かへ……行かない？」

…は？

「何言つてんだ？灰原……」

「……もう、ダメなのよ……良く考えてみて。一体、あなたはこれまでに幾つの事件を解決してきた？」

「さ、さあ……」

「……数え切れないでしょう？あなたがまだ小学1年生なのが不思議なくらい……あなたは事件を解決してきた。なのに、組織に係る事件はほとんど無い……」

……

「―何言つてんだよ。」

「え……」

「少しずつ…近付いてんじゃねえか。組織に…そうだろ？FBI相  
手に、上手く硬直状態を保たせてはいるが…もう、そろそろ時間の  
限界だぜ。」  
「……………」

「―逃げちゃいけねえよ…俺らは。運命から…」

「……………そうね。」  
「…つたく…変にマイナス思考なんだからな…」  
「―さ…の…スだったのに…」  
「え？」

パン

「最後のチャンスだったのに…もう仕方ないわね。」

—目の前の少女は、素早く銃弾を…放っていた。  
そして、右耳を…掠めて。

## 調査2・2（後書き）

…大変なのよ…こっちも。工藤君がちゃんと怖がってくれるように、こっちも実弾使ってるから…

ま、工藤君が驚くのは…ここからなんだけど…ふふっ…

## 調査 2 - 3 (前書き)

この報告書は、ご覧のスポンサー達によって、応援されています。

「世界中の、工藤優作専属の各文庫会社」

「世界中の、工藤有希子専属の各マスコミ」

哀「…そうなの？」

有「…さあ。」

この小説は、ただのドッキリ企画です。全てが作戦通りにいつて  
いる為に、ほくそ笑みでる小悪魔の嬉しそうな表情をイメージしな  
がら、お楽しみ下さい。

## 調査2 - 3

「くそっ…」

地下室を上がりきった俺。

…博士は居ない。

「あれ…コナン君！」

「蘭姉ちゃ…」

くっそ…面倒な事になってきやがった…

「博士に用事があるんだけど…博士、何処が行っちゃったみたいで

…」

「そ、そうなんだ…」

…そうか。それならまだいい…

それより—

「…ねえ、蘭お姉ちゃん…」

「なあに？コナン君？」

…どう説明すればいいか…

「…早く、逃げよう!!」

「あつ、ちよつ、ちよつと!」

くそつ…説明してらんねえよ!  
取り敢えず…逃げねえと!

「待ってよ!コナン君!!」

はあ、はあ…

「ちよつと…どうしたの!? 一体…」

取り敢えず…灰原は、追ってきてねえみてえだな…

でも、見逃したのか？

…見失ったってのはねえだろうな…いや、待てよ……あいつ、俺の  
両頬触って…

「…！やっぱりな…」

―発信機。

「くそっ！」

強く、地面へと叩きつければ…簡単に壊れた。

「ねえ、コナン君…どうしたの？」

…どうする？

誤魔化して…居られるか？

…いや、もう誤魔化す必要は無い。

灰原が、俺を始末しようとしてんなら…組織に、俺の情報はバレて  
いて、灰原に「抹殺すれば組織へ戻れる」とでも命令を出したんだ  
ろ。

「…なあ、蘭。」

「…え？」

―俺は、ゆつくりと眼鏡を外した。

「…俺、工藤新一なんだ。」

~~~~~

―全てを、俺は蘭に説明した。

「…嘘。それじゃあ…」

「ああ…そうだ。俺は江戸川コナンの姿で…その組織の情報を集めてた。」

…もう、どうしようもない…そんな展開になってしまったから。

「灰原が、組織側に掌握されて…俺を、抹殺しようとしている…」

…本当に、申し訳ない。

「ごめん…蘭。迷惑に巻き込んで…」

「ううん…でも、それなら任せて。で…誰だって？寝返ったって子…」

へ…

「灰原…」

「―そっか、やっと決心ついたんだね…」
「…え？」

…どういう事だ？

「始末する…その用意。」
「……」

始末…？

「…大丈夫だよ。私がちゃんと……哀ちゃんの代わりに―」

まさかー！

「ぐあつー！」

調査2-3（後書き）

…少し短いので、多分哀ちゃんにお説教喰らっちゃうと思います。
次回投稿は、また分かりません。ご了承くださいm——m

調査 2 - 4 (前書き)

M「オワタ」

バタッ

哀「…炒めていい?」

有「いいけど…誤変換よ。漢字。」

調査2 - 4

「コナン君どこ？」

…流石に、きづかねえよな…この書斎の裏は。

にしても…どうして？

何で蘭が…？

「あれっ…哀ちゃん。」

「蘭さん…見つかった？工藤君は…」

「うっん…ダメ。もっと早く殺つとけば良かったよね。」

…そうだ。可笑しいじゃねえか。

だとしたら、何でこれまで蘭は俺を殺さなかった？

「仕方がないじゃない…彼は、あくまでも実験対象。もうこれ以上実験の必要が無くなったから、仕留めるの…」

…そういう事かよ。

でも、流石に…蘭もここは知らねえはず…そう、この書斎の奥にある小さな隙間…

「ねえねえ、何処にいますか？」

「そう、ねえ…書斎の中とか？」

っ！

「確かに…コナン君なら、有り得そうだね。」

…ははっ…マジかよ…

よりによって、灰原に…気付かれるとか…ははっ…

…なあ、どうしてなんだ？蘭…

お前、どうして裏切っちゃったんだよ…

…終わった。

全て…

くそっ
…！

「コナン君、居るなら出てきて」
「

えっ
…

まさか
…！

「もう…無駄に書斎広いんだから…」
「

くつくつく…

…そっちから来いよ。蘭。

―お前らは完璧だけど、もう一人が…余りにも失態過ぎるんだよ。

「さっさと来いよ!」

「…ここね。」

「ええ…」

…よっ…! …!

「ーコナン君、見つけ」

カチャ…

「ーへへっ…見つかった……ーなんて、下んねえ事してんじやねえよ。母さん。」

「え？」

「—だから、母さんだろ…そして、そこに父さん。」

~~~~~

…あらっ…

「さっさとその気持ち悪い変装外せ。もう許さねえぞ。」

「ごめんね、新ちゃん。」

『ビリッ、ビリッ』

「でも、良く分かったわね。だって今回、身長トリックまで使ったのに…」

「ああ…かなり薄底の靴履いて、誤魔化してんだろっけど…にしてもし少し高いよな。けど、あの状況で冷静にそれを見極めるのは難しかった…それより、遥かにヒントになったのがいんだよ…父さん。」

「え…」

…やっぱりね。

「—父さんの家の中で履くスリッパ。その音だけは忘れねえぜ？なあ？」

「…優作……」

「いやゝまさか、あんなミスを……」

つと…耳塞がないと…

「優作！何やってんのよ！！」

…はい、一名離脱…工藤君、良く反応したわね。

「でも、良かったわゝ新ちゃんの元気な所が見られ…」

「―ふざけんな！死ぬかと思っだし、今回は蘭にまで変装しやがって…」

「―反省はしてるわ…けれど、そろそろ落ち着きなさい。」

「これが落ち着いてられっか！」

「じゃあ…いらない？」

ほら、目つきが変わった。

「えっ？」

「―言っただしょ。実験は終了…そう、完成したのよ。解毒剤が。」

「…マジ？」

「大マジ。」

大嘘。

「…悪い。灰原。着替えとつて来る。」  
お疲れ様。

…10分後、彼の悲鳴を聞いた私は、一晩を工藤君のお母さんと気持ちよく過ごしたのであった。

M「…なんだよ。この才チ。」  
哀「あなたが悪いのよ。」

## 報告書2「工藤新一ドッキリ計画」

「あの工藤新一が、ドッキリを仕掛けられたらどうなる？」

という計画。しかし…見事に、見破られてしまう。

という事で…

改題「報告書2「工藤新一ドッキリ計画」↓反省会1「工藤新一抹殺計画失敗大反省会」」

「それでは…反省会を始めたいと思います。」

「はい！」

工藤有希子―彼の実の母親の挙手。

「はい、有希子さん。」

「え…つと、今回の大失敗は…この優作のせいだと思います！」

…重要な一言ね。

「流石に、足音を出して新ちゃんに気付かせちゃうなんて…そんな失敗は、絶対に許されないと思います！」

「優作さん、反論は？」

「…ありません。」

「…さて、それでは刑罰の重さについての審議に…」  
「おい、待てよ。」

あら…

「何でしょうか？抹殺対象の工藤新一さん？」  
「そもそも、こんな計画立てたのは誰だよ？お前だろ？何でお前がそこに立ってんだよ。」

……

「私じゃないわ。筆者よ。」  
「は？まさか筆者が俺を殺そうとするわけねえだろ。俺がいなくちゃ話がほとんど成り立たねえじゃねえか。『m i n t t e a r s』という例外を除けば、全部俺は生きてんだぞ？しかも、あの後『もう新一死ネタは書かない』って言ってたし…そもそも、書きたいと思わなければ筆者は俺を殺さねえんだよ。分かって言ってる…」

パァン

「―もう一回、最初から説明してくれる？ま、命が惜しければ言わなくても構わないけど…」  
「…す、すいません。」

「つたく、自分の立場を弁えなさいよ…」

「それでは、審議に入りたいと思います。」

…この後、有希子の愚痴が続き、結局この優作は…

『3ヶ月間、煙草を吸ってはいけない』という事で落ち着いたですよ。

え？どうして「そうよ」なのかって？

…本当にどうでもいい所気にするのね。私が寝たからよ。  
工藤君も…同じように、途中で力尽きたわ。

さて、今回の調査はこれで終了よ。  
報告書じゃなくなっちゃったという、余りにも痛すぎる回だったけど…一応、結論を出すならば…

「工藤新一には、ドッキリは非常に通用し辛いですって辺りかしら？」

…今度は、もう少し手の込んだトリックにしないと…

報告書2「工藤新ードツキリ計画」(後書き)

次回はいいよ…史上最大の調査です。

…次お会い出来るのはいつでしょうか？(笑)

### 調査3・1（前書き）

この番組は、ご覧のスポンサーによって放送されています。

「灰原哀同好会」

「哀ちゃんワールド」

「赤い彗星さん」（調査依頼、感謝！）

哀「…これ、何？」

M（…逃げる用意）

### 調査 3 - 1

皆さん、お久しぶりね。灰原哀よ。

さて、突然だけどクイズ…今日は何の日だか知ってるかしら…  
そう！筆者の誕生…じゃないわよ。12月よ。クリスマスとまとめてプレゼントされ易い可哀想な季節よ。

…え？筆者のこのサイト1周年記念？  
残念だけど、それも違うわね。まだ8ヶ月程よ。

…ヒント。一ヶ月…

分かった？

そう！この小説の1ヶ月振りの更新を記念する日よ。恐ろしく無駄な期待を抱いた読者の皆様には、心からお詫びするわ。

どうでもいいわけだけど、いよいよ最大の調査企画が始まるみたいよ。

「みたい」ってのはまだ私が依頼内容を確認してないから、って事。

ま、楽しい依頼を期待して…筆者の元に言って来るわ…それじゃあ、ね。

「ーという事だ。灰原哀の調査報告書第3弾頑張ってーぐへあっ…！」

哀しくも、彼の肉体が次に日の目を浴びるのは…数日後でしょうね。  
それまではゆっくりと眠りなさい…

さて、何で彼が私に抹殺されたかを説明しておくわ。

史上最大の企画とか、まだ二回しかやってないのに言った上、それがただの個人情報調査だったからよ。

名前は「黒羽快斗」。どうやら結構頭の良い高校生らしいわ。ま、くだらないし、あんまり興味ないから、さっさと調査を済ませるとしますか…

まあ、それじゃ…調査開始、と。

まず、彼の学校…洗い出しておいたから確認してみましようか。江古田高校2年生…まずは、ここの教員から確認してみましようか。

学校関係者の証言1「IQ400」

…何ですって？

ええ？

ちよつと、どういう事？

私…確か、組織時代に195で…それが同年代最高、って言われたけど。

工藤君が元の体の時に200超えた事あるとか、叫んで喚いてた（筆者注：自慢しただけです）のはあるけど…まさか…400とは…ねえ。

これ言ったら、工藤君張り合いそうね…ふふっ…

学校関係者の証言2「勉強しない」

あつそ。大方予想通り。こういうタイプは一々勉強したがないのよ。天才だと思ってるから。

万能超人はいい加減にしてほしいわ…工藤君が代表的な例ね。

私？何が万能よ。運動神経0だし。

筆者？彼が一番程遠いわ。全教科ダメ。

学校関係者の証言3「授業中騒がしい」

こっち系か。熟睡タイプじゃないのね。工藤君とそこは正反対みたい…

…え？幼馴染の中森青子と、随分と騒ぎを繰り広げる？あらそうじゃ、彼女にも色々後で聞いてみようかしら…

学校関係者の証言4「同じ奴をもう一人見た」

何が言いたいのがよくわからないからスルーパス。

学校関係者の証言5「何故かいきなり推理ショーを始め、事件を解決してしまった」

ああ、4が理解できたわ。工藤君と錯覚したのね。

学校関係者の証言6「ところで、君何者？小学生にしては随分と…」  
はい、次。中森さんの所に行きましょう。

学校関係者の証言7「可愛かったね。今の子。」  
学校関係者の証言8「快斗君、ロリコンだったわけ？」  
学校関係者の証言9「危ないな…立ち歩かせるわけには…」  
学校関係者の証言10「教頭。あなたが捕まえに行くのが、一番危  
ないです。」

…何のコントしてるの？  
はい、次…え？次回に続く？

久々に…やろうかしら。

すう…

「ふざけんじゃないわよこの糞筆者がああああ……!」

…沈黙したようね（筆者注・続く）

### 調査3・2（前書き）

あ！野生の筆者が現れた！

灰原哀のターン！

パン

コ「…おい、銃弾で一撃は酷くないか？」

哀「てへっ…」

コ「『てへっ』じゃねえだろが！！」

### 調査 3 - 2

こんばんわ。いいえ、投稿される時刻はおはようなのかしらね。

さて、今回は調査の第二回。彼と親しい人物の証言を集めたわ。

？中森青子

「あら…どうしたの、キミ。

え？ば快斗の事？を聞きたいの？

ば快斗は…とにかく、馬鹿よ。大馬鹿。

だって…だって…度々マジックで私の「ピー」を除き見して…レパ  
ートリーが多すぎて困ってるのよ！

私が怒るとすぐからかって…色んなマジック使って逃げ回るし！

全く…ま、もう慣れ…ううん、ダメよ！今日こそこんな事させて  
たまるもんですか！

え？快斗の事、どう思ってるかって…べ、別に…あんな馬鹿、ど  
うだっていいんだから…！」

…最後でツンデレ属性丸出しね。

ま、いいわ…っ…

「あ、あと…快斗見かけたら、魚ぶつけといてね。快斗、魚に弱い  
から！」

…はいはい。次。

？小泉紅子

「彼…ね。」

気にしちゃダメよ。知れば知る程、どつばに嵌るわ…  
それにしても、随分と声が似てるのね。あなたと私って…」

…？声が似てる？

というより、ほとんど丸つきり同じじゃない。  
ま、当たり前よね…ふふっ。

「あと、彼にこれ…渡しといってくれるかしら？」

…魚。

何？彼はそんなに魚に弱いのか？

？白馬探

「やあ、お嬢ちゃん…何の用だい？

…何？ああ、彼の事か。

ダメだよ…彼に興味を持つちゃ。変な方向に引き込まれちゃうから。  
それじゃ、僕は事件で忙しいので…」

警視總監の息子ね。役立たず。パス。

…まあ、魚に弱いって事はよくわかったから、もう本人に話しかけてみましょうか…え？次回に…？

~~~~~

哀「続かせないわよっ!!」

M「うぎゃああああ!!」

~~~~~

さてと…彼の住所は……ここね。

随分と豪華な家ね…

『ピンポン』

「…あらっ?」『ピンポン』

『ギイイ…』

…空いてる。鍵が。

ま、まさか…これって、殺人フラグ…？

嘘よ嘘よ。いくらなんでもその展開は…

「快斗についての調査にも関わらず高校生殺人事件に関わる羽目になる」

そんなの御免よ！？

ちよつと…

「誰か！誰か居ませんか！？」

…嘘よ。嘘よ！

ちよつと…まず、靴脱いで…

誰も居ないの!?

い、嫌よ…いくらなんでも、また事件に…

というより、もしこれで事件だったら…

「事件吸引体質」が、私にもあったって…思われちゃうじゃない!

ど…

「誰か、居ませんか!?’」

誰か…!

### 調査3 - 2 (後書き)

調査中の思わぬ急展開！

哀「このままじゃ…私の印象度が…！事件吸引体質だなんて思われ  
たら…！」

コ「俺じゃねえんだよ！結局…事件は、灰原が呼んでたんだ！」

一体、この醜き争いを含め、どうなる！？

哀「醜き…ですって…？」

あ、ちよっ…やめっ！やめ…うわああああ！！！！

次回に続く

### 調査3・3（前書き）

歩「あのね、哀ちゃん。女の子が、男の人をお願いする時は…おねだりするみたいに、頼むと…大体上手く行くんだよ」

哀「…処世術学んでるのね。」（でも毛利探偵辺りに使えそうだから…習得しておこうかしら）

「おねだり顔を習得しますか？」

はい

いいえ

「灰原哀はおねだり顔を習得した！」

コ「…やめろよ。お前。てか、これ何のゲーム？」

哀「ねえ、コナンくん。フサエブランドのウォレット買ってよ」

…おねがい。」

コ「な、何で俺が…」

哀「この前約束したでしょ。演技の時…ね？…ダメ？」

コ「う…い、嫌だよ。博士にでも頼…」

パァン

「コナンは倒れた。」

歩「哀ちゃん、すごい！」

哀「そう…かしら。」

M「…灰原より歩美が怖いぞ。」

て事で、本編に突入。哀ちゃんのおねだり顔は脳内補充してみて下さい。今回出てきますよw

### 調査3 - 3

……誰か……！

「誰か、居ませんか！？」

……居ない。2階を探しても、誰も見つからない。

「……一体、何処行っちゃったのかしら……」

全く……何処へ……

『クルン』

…へ…？

「うわああああ！？」

え、え！？

「ちよつ、何勝手に人の家に入ってきてんだよ！？」

その前に、どうしていきなり隠し扉から出て来てるのよ！？登場方法がいくらなんでも可笑的いでしょ！？

「さ、さ！出てった出てった！」

むう…このままじゃ…

…そうだ。

「お、お兄さん…」

「なんだ？お嬢ちゃん…さっさと………」

「ぐすつ、ぐすつ…私、迷子になっちゃって…ぐすつ…」

むしろ失敗したらというか、これで放り出したら撃つわよ？…嘘だ  
けど。

「ぐすっ、ぐすっ…」

「わ、悪かったよ…し、下のリビングに連れてってやるから、な？  
泣くなって…」

「ぐすっ…う、うん…ありがとう。」

—はい、大成功。だけどこれから演技口調使わなくちゃ…面倒ね。

「さてと…で、どうしたんだ？何処で迷子になった？」  
「えっと、えっとお…」

…何処が良いかしら…彼を調査するのに、最適な場所…

…そつえば、青子さんがマジックの話をしてたわね。彼がマジッ

ク好きなら…きつと…

「すぐ、そのデパート…」

「そうか、あそこか…」

そ、今日怪盗キッドが盗みに入る場所…

もしかすると、キッドのマジックを暴いたりするかもしれないわね。

そうすれば、中々展開的にも面白い物だし…あとで彼から情報料を取れるわ。「キッドの奇術の見破り方」なんて物をちらつかせれば、払ってくれるかも…ま、自力でそれを探そうと逆に奮発されたら、それはそれでいいでしょうし。

報告書を書くには…あそこは最適ね。

「ね、ねえ…お兄さん。」

「何だ？…ほい。クッキー。」

「あ、ありがとう…」（パクッ）あのね…」

あら、結構美味しいじゃない…？

「お兄さん、マジック好き？」

「あ、ああ…好きだけど。どうして？」

「あの人…って、黒羽盗一でしょ？」

黒羽で、マジックって時点で気付いたわーといつもなら言う所なのだが、そこは堪える。

「ああ…親父に憧れて、な。」

そうだ…もう一つ。

「ねえ、ところで…怪盗キッドって、知ってる？」

「あ、ああ…まあな。巷を騒がせてる、クールな…」

「そうそう。ねえ…お兄さん、デパートに連れてって！」

「えっ!?!」

ごり押しするわよ…ふふっ…

「お母さんも見つかるかもしれないし、キッドもそこに今日出るみたいだから…ね、おねがい！」

「うっ…」

もう一押し…

「…ダメ？」

「吉田さんから教わった…ってわけじゃないけど、奥義。おねだり顔。」

「わ、わーったよ…連れてっから、お母さん見つけて帰るんだぞ。」  
「わーい！」

よしっ…OK。

「それじゃ、早速行こうか…って、そういえば。紅子の声がしたはずんだけどなあ…」  
「え？」

ポリポリと頭を掻き篦る彼。

「紅子の大きな声がしたから、出てきたんだけど…来ないしな。帰っちゃったのか…」  
ああ、それ私よ。私。

「後で連絡しとっかな…」  
しなくていいのよ。私だから。

…そうだ。そういえばこれもやっとなないと…

「それじゃあ、お兄さん！これあげる！哀からのプレゼント！」

「あ、ああ…ってうわああああ!!」

「ど、どうしたの…? お兄さん。これ、お魚さんだよ?」

「やめる! やめろって…わっ!」

飛距離…5 m。かなりの物ね。壁にめり込んでるし…大丈夫かしら。  
この家の耐久。

さつと彼は私から魚を取りあげて、外に放り出したわ…可哀想に。

…家といえば。

「ね、ねえ…お兄さん。」

(まだあんのかよ…) 「なんだ?」

「…さっきのお部屋、何?」

ごり押し…やってみようかしら。

「さっきの部屋って…」

「ほら! 2階の隠し扉…ねえ、何があるの…? 教えて、教えて!」

早々に奥義、おねだり顔。

「ダメだ。あの部屋は秘密の部屋だから…父さんの大切な部屋。ダ

メ、ダメ。さ、行くぞ!」  
ちえっ…これは無理そうね。

…ま、まだまだ調査はここから…本性、見せてもらおうかしら…

### 調査3 - 4

「さてと…お嬢ちゃんのお母さん、何処かな？」

「…う、うん…」

さてと…ここから、一体どれだけの時間誤魔化せるかしら？

小学生らしく、ちょっと可愛こぶって、時間上手く潰したけど…キツドの登場まで、まだちょっと時間あるわよね。

出来れば彼がどんな反応を見せるか見たいけど…

「ねえ、良いでしょ？キツド出てくるまで待つても」

「ダメだダメだ！早くお母さんの所に戻らなくちゃ。」

「え？」

…ぶりっ子無駄かしらね。うーん…困ったわね。万策尽き果て…

きやつ！

「全員、動くなあ！」

ちよつ、ちよつと！？これ…えつ、えつ！？

「この小娘を傷つけないければ、道を空ける！屋上まで道を空ける！」

…筆者の策略、ね。って、そんな事を考えてる場合じゃないわ。捕まってるし…逃げ出せないし。屋上の宝石を取るまで私を人質にして、とって脱走…か。仕方ない、宝石を取る瞬間に攻撃すれば…何とかなるかしらね。

…迂闊だったわ。まさか筆者がここまでの攻撃を仕掛けてくるなんて…

「—ようし…黙ってるよ。静かにしてないと…ただじゃおかねえからな。」

…まったく…面倒を作ってくれて…

「待ちなさい！」

…え？

ら、蘭さん？

「これ以上進んだら…力づくで、止めさせてもらいますよ？」

「ほう…やれるもんなら、やってみやがー『パシユツ』ふえっ、…  
…う…ああ…」

…寝た？

え？というより、何…？蘭さん、何したの？いった…  
—違う。蘭さんじゃない。蘭さんじゃなくて…

「お嬢さん、全ては美しき夜空の中で…漆黒の誘いの中で。それ  
では、行きましょう。」

…キッド！って、ちよっ…はやつ！階段上るの早いわよ！

「待ちやがれ！キッド！女の子に手を出すとは…卑怯だぞおおお  
！」

中森警部？ちよっと、收拾つかないでしょこの展開！？

「…ひとまず、安心ね。」

やっと空を飛び始めた…か。

「…申し訳ございませんね。お嬢さん……怪盗として美しく無い所  
を見られてしまい…」

「あら、助けてくれた事には感謝してるけど？…それとも、やっぱ  
り素顔を知られてしまった事？」

…よね。多分。このキザっぷりを考えたら。

「…まあ、そうなりますねーどうしますか？警ー」

「言っわけ無いでしょ。あなたには助けてもらったし…まるでその  
恩を感じてなかったかのように返すつもりはないわ。それ以前に、

あなた気付いてたでしょ？一度、麒麟の角の事件の時に、私に会った事があるって…」

「ええ。まあ…ただ、少なくとも取り払おうとは思いませんでしたよ。あなたのような美しい女性を、間近で見られる機会はそうそうない…」

…まさか。

「白色の、この月明…」

…H。」

「おや、気付かれましたか。」

「『白』なんて単語使うからよ。そういう所、彼同様抜けてるのね。」

「…探偵君ですか？」

「ええ。まあ、彼の為にも、あなたの正体は隠しておいてあげるわ。正体言っちゃったら、彼落ち込むもの…何度もあなたに挑戦して、敗れ去り『次こそ捕まえる』って彼が一番見てて楽しいのよ。」

「おやおや、悪趣味で…」

「貴方ほどじゃないと思うけど？絶対に私の事、これから家に帰すつもりないでしょ？」

「…飛んでる方向ですか。」

「ええ。」

ふふっ…意外と面白いのね。彼も…

「…しかし、お嬢さん。あなたが目指すべき場所は、これで方角は正しい筈ですが…」

「え？」

「—東京都。。。市。。。………」

…え。

ふふふつ、うふふふつ…

「…絶対、正体言わないと誓うわ。怪盗さん。本当にあなた、不思議な人ね。」

「いえいえ…」

「―ありがとうございます。」

「これぐらい、お安い御用で。それでは、終わり次第―」

「ダメよ。事に持ち込むようだ…」

「―分かってますよ。それでは、今日は断末魔を子守唄に、家の屋上で羽を休ませて頂きます…それでは。」

…ふふつ。ありがとう。

「あ、あと…」

え？

「―水魚の中の化物については、話を交わさない方針、貫いてくだされば…ありがたいですが？」

「あらあら…それは無理だと思うけど？」

「…ふふつ、それではお嬢さんには一度じっくり地まで旅行を―」

「落とすの？まあ珍しく冗談に聞こえないから、そうするわ。『魚』  
というキーワードが禁句なんですよ。いいわ。」  
「どうも……おっと、着きましたよ。」

「ありがと怪盗さん…一晩、良い空の旅が出来たわ…」  
「それはそれは……しかし、出来ればあなたの―」  
「分かってるわよ。…でも、それは大丈夫。」  
「そうですか。」  
「それじゃあ、ありがとう。…また。」  
「ええ、また会える日があれば…」

…優しいのね。彼。  
「あなたの心を美しく」とでも言いたかったのかしら？いいえ、彼  
ならもつと言い回しを考えそうだけど…  
…気付いてるのね。私の心に巣食う闇に…ふふっ、彼の洞察力かし  
ら？

さてと、…やるべき事は一つ。

奴の抹殺…！

↓  
数日後↓

「おい、報告書まだ出来てないのか？」

「ええ。ちよつと、今回はよすわ。」

「え？」

そう…

「目的を果たさせてくれた、白い翼があつたから…ね。」

…  
ありがとね？怪盗さん。

### 調査3 - 4 (後書き)

NEWS

「都内某所で、まして。氏が気絶した状態で発見されました。『オチが大した事ない…申し訳ない』と何度も呟いていたそうです。外傷は特に無く、精神的に追い詰められていたと見られています。」

哀「工藤君。」

コ「え？」

哀「…次の問に答えよ。誤答または解答しなかった場合、抹殺する。『どうやって彼を気絶させたか』？キスした？ハグした」

コ「え、ええ……？（その際に何か針でもさせば気絶させられるよな……）」

哀「答え……」

コ「う、うぐっ……な、何で？」

哀「外れ、っと……？なわけないでしょ。？の普通に『口の中に毒薬を突っ込んだ』よ。馬鹿ね。」

お疲れ様でした。最後の被害者、江戸川コナンさん。  
でも、僕よりマシですね。by?の被害者

… 哀ちゃんを虐めた罰を受けた気がします。 ちょっと調査4からは  
哀ちゃんをもう少し慎重に扱います。 申し訳ありませんでしたm（  
—） m何故か反省してます。 申し訳ありませんでしたm（—）  
m

#### 調査4-1（前書き）

あやいろ。さんのリクエストにより、この調査は行われております。  
感謝！

mineさんの妄想により、この調査は行われ—

哀「何か言った？」

M「い、いいえ何も。」

哀「そう、なら良いわ。私、出掛けてくるから…」

M「へ、へえ…」（…哀ちゃん、ご機嫌？）

## 調査4 - 1

「ら、蘭の身体能力調査あ？」

―さて、今回の調査は蘭さんの身体能力総合についての調査よ。

「んな事言ったって…何すりゃ良いんだよ。」  
「たく…探偵さん。」

「帝丹高校って、全国体力測定テスト…みたいなものやってるでしょ？」

「あ、ああ…まあな。確かこの前やったって蘭が言ってたから…」

「―じゃあ彼女から受け取れば良いじゃない。」

「…そ、そうか。でも簡単に渡してくれるとは…」

「―じゃあ盗みなさい。」

「おい。」

さてと…まあその紙のデータを取得したら、それで調べられないような身体能力…動体視力とか、その辺を調べてみようかしら。

まあ、最後は実戦形式で何かしてもらって…

「―で、報酬は？」  
え？

「まさか、何も渡さずに仕事させるんじゃないやねえだろうな？」

…面倒ね。拳骨一発と行きたい所だけ…

「…ええ。分かったわ。それじゃあ、推理小説——」  
「ダメ。もう今月の新刊全部買った。来月分、全部予約した。」  
ちっ…

「…それじゃあ。」  
「お？」

「—私のゴスロリショット一枚。」

「は？」

「あら、あなたそいつの好きでしょう？ 蘭さんのロリータで鼻血出してたくせに…」

「っておい！ 何で知ってんだよ！？」

私の情報網… って事に読者の皆さんはしておいて頂戴。 実は「ピー」。

「蘭さんフェチのあなたなら要らないでしょうし、それなら園子さんに買い取って貰いなさい。 多分、何かのキャンペーンに匿名で使ってもらえて… かなりの額が手に入ると思うわ。」

「ま、まあ… だったらいいけどよ、お前は良いのか？ そいつ堂々と姿を曝すような事して… 組織に―」

「―心配しないで。 ちゃんとメイクするから… 原型壊れるくらいに。 但し、ちゃんと調査し終えないと渡さないから、そこは了解しておいてね。」

「あ、ああ… わーったよ。」（ったく… 何だか、こき使われてる感じがしねえんだが…）

― 大丈夫。 この賭け、絶対勝てるわ。

だつて、最後に「実戦形式」の戦闘が待ってるんですもの… ふふっ…  
… っふふふふっ…

…という事で、次回からいよいよ調査開始よ。  
どうなるやら…工藤君の命、あと何日持つか…

## 調査4-2

「テイク1。」

「おい。待てよ。」

さて、現在10時。いよいよ蘭さんが寝る時間、作戦開始よ。どんな日に……

「だーかーら！」

「え？」

あら、どうしたのかしら。この熱烈変態推理オタク……

「どうしてお前がこの部屋で寝るんだよ！おっちゃんが麻雀で居ねえからって！」

「あら……蘭さんの部屋で寝て欲しい？」

「そりゃそうだろ。さっさと出て……」

「そうね。さっさと蘭さんに工藤君の正体が小学生でお風呂に一緒に入るのを日頃楽しんでいた変態——」

「すまん。何でもない。」

全く……

「さて、気を取り直してテイク1よ。私は貴方に取り付けたカメラの映像を、ノートパソコンで見てるから……じゃあ、行ってらっしゃい。」

「……へーへー。」

さて、それでは探偵さんのお手並み拝見、と……

『テイク1』

――静かに、僅かな音すら立てずに江戸川君は暗闇に包まれる愛しい彼女の部屋へと入った。はい、変態ね。お終……いにしちゃダメね。

良い調子。中に入って……あら？動かなくな……

？何してるの？早くそこにある棚から……あっ……

『コナン君？』

「あっ、蘭姉ちゃ……」

『もう……早く寝なさい。明日も学校あるんだから。』  
「うっ、ごめんなさい。」

……はい、処刑決定

「グアツ！て、てめっ何してー」「テイク2で失敗したら拳骨じゃすまないわよ？……おっと、丁度良く鞭を持ってきたみたい……」

「次で決める。」

よろしい。

『テイク2』

あつ、え？

『コナン君！もう…寝れないの？』

バレルの早……

「え、あははっ、あはっ……」

『一緒に寝たい？』

え？

「あ、あ……あー……（そうだ、寝ちゃえば勝ちだ）うん！」  
『じゃ、布団に入りましょ。』

……

（怒怒）

（怒）

(怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒)

ガチャ、パチツ

「眩しっ……あら……哀ちゃん？」

（灰原！？）

「コナン君と一緒にじゃないと、私眠れないんですっ！」

「コナンにおける不等式の公式より、灰原哀の涙声のおねだり>>一生掛かっても越えられない壁>>コナンのおねだりである。証明終わり」

「え、え？」

「ごめんね、コナン君。哀ちゃんと寝てあげてくれる？」

「あ、ありがとうございます！」

（凄い……哀ちゃんって笑顔になるとこんな可愛いんだ……）「良かったね、哀ちゃん。」

はい、終了  
『ゴキッ』

「……骨が……」  
「大丈夫。折ってないから……理解した？」  
「はい……」

ふう…  
「じゃあ、5分後テイク3。」  
「……」

さて、それでは次回、テイク3、4、5をお届け予定よ。

「なあ……灰原？」  
「え？」

「そういう予定……って事は、もう最低二回は……こうなる、のか？」

「ピンポーン。」

「……もう一つ。」

何よ。一々うるさ……

「紙……どこに、あるか……分からねえんだけど。」

……

「……テヘッ」

「……死ぬ。」

じゃあ、次回もよろしくね？

#### 調査4・3（前書き）

哀「…次の投稿はいつ？」

M「さあ…」

哀「それより、帝丹戦隊セーラームーンの企画、やるんじゃないの？ほら、あなた毎回の頭に江戸川コナンを爆発させるって素晴らしい企画立ててたじゃない。」

M「…覚えてたら、また今度…ね。」

## 調査4-3

「テイク5」

はい、皆さんこんばんは。今日も絶賛夜更かし中、灰原哀よ。身体に毒？そうね…

…え？何？それよりテイク5ってどういうことかって？前回テイク2で終わってたじゃないかって？

まあまあ、順序を追って説明するわ…

テイク3 後ろ回し蹴り

テイク4 裏拳

以上。

「ら、ん……」

しかし、個人情報になるとこの迷探偵の娘、突然目覚めて一撃与えて……そしてまた眠る。

中々工藤君も参ってるみたいね。

「どうしたの？さつさと終わらせて来なさいよ…幾らなんでもあのへボ探偵に救助を要請するのは嫌でしょ？」

「…な、何もしらねえ、で…」

はあ。情けない。

—ここは私の出番、かしら？

「……………何これ。」  
さ、早速解析を始めましょ。

「…最初からもってたのか。」

「ええ。まあね？」  
「……………」

はい、解析スタートね。

『全国体力テスト』

はい、結果を一覧にして並べてみ…ると流石にちょっとプライバシーの侵害だあーだこーだ言われそうだから、体力要素バランス判定図なるものだけ、ご紹介するわね。評価は10段階よ。

筋力…腕相撲や重量上げとかに見られる力らしいわ。評価9

筋パワー…意味不明ね。野球のホームランやバレーボールのスパイクに見られる力らしいわ。瞬間的な力、って事かしら？まさに彼女の空手の一撃一撃の圧倒的な力が証明してる部分ね。評価10

筋持久力…全身持久力と比べると、激しい運動をどれだけ続けられるか、って事かしら。評価9

全身持久力…マラソンとかを完走するのとかに必要な力ね。評価8

敏捷性…足の速さとか、そういうのらしいけど…窓ガラス蹴破るのにはスピードも必要らしいわ。評価10

柔軟性…関節の柔らかさね。評価9

…何この万能超人。

続く

おまけ〱その他の方々の体力テスト評価〱

江戸川コナン

筋力 5

筋パワー 7

筋持久力 7

全身持久力 8

敏捷性 10

柔軟性 10

哀「つまり、無駄にすばしっこくて柔らかいって事ね。」

歩「コナン君、すごい！」

コ「別に…そんなでもないけど…」（工藤新一の時はもっと筋力もあっただけだな…まあしゃあねえか。）

灰原哀

筋力 1

筋パワー 1

筋持久力 1

全身持久力 1

敏捷性 1

柔軟性 1

コ「…お前、サボっただろ。」

哀「悪い？」

コ「テストぐらい真面目に…」

哀「―受けたら、あなたなんて目じゃないんだから…」

コ「え、え？」

筆者…NO DATA

コ「…どゆ事？」

哀「データ入手する直前で逃げられちゃったわ。まあ大体全部平均より少し上ぐらいだと思っけど。」

コ「へえ…」

## 調査4-4

みなさんこんばんは。まさか今年中にこの投稿が成されるなんて、想定してなかった方も多かったんじゃないかしら…なんてたつてこの更新率なものね。

「は、灰原…死、ぬ…ぐほっ…」

「新一！！許さないんだから！！」

さて、実況するわね。現在、工藤新一が毛利蘭にボコボコに叩きのめされている。以上。

そう！流石読者の皆さん…こんな糞みたいな書き方を筆者がしてめちゃんと話を理解してくれたみたいね…そうなの。私の解毒剤で彼を戻して毛利蘭さんに暗示をかけて工藤新一が毛利蘭に「ピー」したという事を認識させて、工藤新一を襲わせているの。

…え？「ピー」って何かって？残念よね…この小説、15禁じゃないのよ。筆者はようやく15歳になったんだけど…出来る事なら、いつかしっかりとした形で書いてみたいものね…

おっと、そんな事を言ってる内に工藤君が死に掛けてるみたい。

とりあえず気絶するまでに暗示は設定してあるから、まあ骨数本で助かるんじゃないかしら…

「新一い！今更帰ってきて…あんな事して！許さないんだから！」

「ちがつ、蘭！騙され『バキッ』ぐわああっ！！！」

はい一本目…

「ぐっ…ぐっうわああああ！」

激痛。この心地良いボイス…嗚呼、神様…感謝…  
…なんてしないわよ。冗談よ、冗談。

「新一い！私の…『ピー』はどうだったのよ。」  
「こらこら。止めなさい。」

「な、何言って…んだよっ…ぐわあああああっ！」  
「今更誤魔化さないでよ！あんな事して…ふざけないでっ！！！」  
…まあ、そもそもこんな賭けを実行した工藤君がいけないのよね。  
可哀想な気もするけど…

さ、そろそろ止めね。

「死ねえ…新一い！！！」  
もう言語が狂ってるわ…ま、さよなら…お休み。工藤…

ええええええっ！？

「へへっ…どーだ。灰原。」

「ちよっ…それ、反則でしょう！？」

麻醉銃！？しまった…私としたことが…

「さーてと……ま、一応……約束だからな。」

まさか……こんな事になる……なんて。

「……ちよつと急用を思い出したわ。工藤君、さよなら。」

「ちよつ……待て！灰原！」

さて……次回は報告書よ。お楽し……

え？

ちよつと、筆者。早く終わりにしなさいよ……え？私のシヨット書がないと止められない？

…後程、謝罪会見をさせるとして、これはどうやら…やるしかないみたいね。

「分かったわ…工藤君。後で渡すわよ。ちょっと待ってなさい。」

「おっ…サンキュ。灰原…」

「たく、この変態探偵…」

「翌日の皆さんの一言」

灰「うーん…なんだか迂闊だったわね。」

蘭「あれ？私、どうしてこんな所で倒れてるんだろっ…」

コ「…アニメ版の切り抜き、ですか…灰原さん…」

今回は報告書…要らないわよね。  
じゃ一応結論…

「工藤新一は立派な変態である。」

…違ったわ。

「毛利蘭は優しく危険な人間兵器である。」  
それじゃ、次回もよろしくね？」

## 調査5・1（前書き）

医「そうですね…骨折17箇所。全治までは…半年はかかるかと…」  
蘭「そ、そんなぁ…コナン君、ただ階段から転げ落ちただけで…」  
コ「大丈夫だよ…すぐ治るよ。蘭お姉ちゃん。」（あんにやるお…  
…）

『クシュン』

哀「っ…」

歩「どうしたの？哀ちゃん…もしかして風邪？」

哀「うーん…そうかしら…」（工藤君…私の話してるわね…）

## 調査 5 - 1

こんばんは〜灰原哀よ〜

え？なんで上機嫌かって？そりゃ決まってるじゃない…なんてたつてー

「江戸川コナン！複雑骨折にて入院！ひゃっほーーーーい！」

…さて、まあ私のキャラクターじゃないからそれはおいといて…と  
りあえず、今回は工藤君は前回の一件で入院してるのでお休みよ。  
まあ良かったわ死なくて…ほっ…  
今回の調査なんだけど…

…感想欄が盛り上がってるのよね。  
ハルイズミさん、Seven starさんから「園子さん」、あ

やいろ。さんから「吉田さんのお母さん」の調査。そしてどちらもまさか『ピー』じゃないかと…

…有り得ないと信じて、不安だから調査する事にしたわ。そう、絶対それは無いと信じて…

……ちょっと待って。

哀「ねえ、どうやって私に調査させるつもり？」

m「……」

哀「まさか、考えてないとか言うんじゃないでしょうね？」

m「……」

〃〃幾時間、その部屋から破壊音が響き渡りました〃〃

皆さん、おはよう…ふあああ…ちょっと眠いわ…疲れたし…  
さて、それでは早速調査しましょう。

？吉田さんのお母さんのスケジュールチェック  
専業主婦…だったわよね確か。

とりあえず、吉田さんから話を聞きましょう。

哀「ねえ、吉田さん。」

歩「え？」

哀「お母さんって何か趣味とかある？」（そうそう…こういう方面から…）

歩「うーん…特に無いかなあ。」

哀「そう…普段忙しそう？」

歩「いつもはそんな事ないけど…そうだ、たまーに木曜日に、  
夜に一人でどこかに行っちゃって、遅くまで帰ってこない事がある  
の。この前歩美、中々寝れなくて…それで、起きたら…お母さんが  
帰ってきて、慌てて何か隠して『早く寝なさい』って。その時凄  
くお母さん疲れてたように見えたの…」

哀「…それって何時ぐらい？」

歩「えっと…出てくのが6時ぐらいで、帰ってくるのが11時ぐら

い…なのかなあ。」

哀「……もしかして、木曜日っていつもお父さんが帰ってくるのが遅いのかしら？」

歩「えっ……そ、そんな事は無いと思うけど……」

…という事で、とりあえず浮気調査してましたってオチは無いわね。さて、それではいつものように調査を彼に頼…

…しまった。

頼みの彼が居ないじゃない！この役立たず！！

……しょうがないわね。明日は土曜日。白羽の怪盗さんに『あれ』をお願いして、上手に彼を釣り上げてもらいましょう…うふふふ

……

## 調査5・1（後書き）

m「やる気無くなったらこっち書いてますよ。」

哀「普段から両方書きなさいよ全く…」

m「…スイマセン。」

**特別調査編：筆者緊急調査（前書き）**

バトン企画に便乗です。

ただバトンの方も内容は同じですw

哀「サボリね…」

## 特別調査編：筆者緊急調査

突然ごめんなさいね。灰原哀よ。

今回は私が例の彼を呼びに行くストーリー…だったはずんだけど、バトンが回ってきたのに何もしない筆者を（誰かが）ボコボコにしてみたい、代役としてここで工藤君に演技してもらおうと思ってたけど良く考えたら彼骨折してたので、一つ一つ彼の個人情報を漁りながら私がバトンを回す事にしたわ。

哀「…ってこれまるつきり雛花さんのパクリじゃない。」

m「……哀ちゃんが答えるから良いってことで……げほっ。」

…じゃ、行くわね。今回はこの筆者の秘密をボコボコに吐かせる回よ。（ちなみに同じ内容を活動報告でも回してるわ）

### ・住所

哀「山奥よね。」

m「ああ、キッドに連れて来てもらったんだっただか哀たん…」

哀「…調査終了にして実験タイムに移るわよ。」

m「ごめんなさい哀ちゃん。二度とこんな事はしませんからお許しください（ry）」

哀「で、何処？」

m「…山がないところ。」

哀「はいはい。」

・名前

哀「本名。」

m「……。」

哀「吐きなさいよ、ほら。」

m「……」（ブルンブルン）

哀「…APT X 4 8 6 9。」

m「はい、俺の本名は『ピーピーピー』です。」

哀「…隠しやがって。」

m  
ブルブル

・あなたは馬鹿ですか？

哀「馬や鹿のような足の速さは持ち合わせてないのは明らかだから多分違うわね。」

m（コクン、コクン）

・じゃあPNを教えてください。

哀「プライベートネーム…」

mine「いや、違うから違うから。」

・由来を教えてください。

哀「プライベートネームとは…っと。あら？wikipediaとかに乗ってないの？」

m「…あるわけないって……」

哀「どうせ由来なんて『哀たんは私の物』とか言っんでしょ。」

m「いや、違うから…」（mineとmainを試験で書き間違えたからとか間違ってもいえねえし…）

哀「…英語の成績悪いのね。」

m「…平均ぐらい？」

・代表作は？

哀「代表作と呼べるレベルの物が無いので省略するわよ。」

m「…認めます。」

・自分の未来は？

哀「ある日。毎日のように灰原哀を現実世界で探していたいい歳した青年が居た。そして、とうとう彼は見つけてしまった―青年は急いで駆け寄って質問責めにするが、しかしその少女は冷酷な瞳でこう答えたのだった。『消えて』―それが余りにも可愛かったらしく、ついに彼は…」

m「やめなさい…」

哀「何よ。ここからがいいとこなのに……そして彼は…」

m「だからもうやめろって!」

哀「はいはい…彼はとうとうその少女を抱き締めてお持ち帰りしようとした。するとその少女は途端にポケットから拳銃を取り出し彼に発砲したのであった…」

m「……虐めですかそれ…」

・一番仲がいいと思うユーザーさんは？

哀「彼に仲がいいと思われると不幸な事しか起こらないから省略ね。」

「

m「……今日機嫌良いの?」

哀「ええ、絶好調よ。もう幾らでも筆者を虐めなくなるくらい!」

m「……了解です。」

・敵

哀「睡魔、成績、体力、電気代、ガス代、水道代…」

m「俺独身じゃないからね、哀ちゃん。」

哀「馬鹿ね。あなたこの仮想世界飛び出したら周り敵しか居ないじゃない。」

m「…いや、そんな事……う…」

・自分の戦闘力は？

哀「4・869。あなたより下は居ないわね。」

m「…ちなみに哀ちゃんは？」

哀「(48・69) ^ 969 + 6261 …… あ。」

m「え？」

哀「工藤君は今・4・869だから、今の内なら倒せるわよ？主役交代のチャンスなんじゃない？」

m「…え、遠慮します…」(いや…哀ちゃんにとはいえ骨折られる主役は…)

・一番好きなコナン映画

哀「ロストシップの時に『哀ちゃんが頬を叩かれたああ！ふざけんなああ！』って騒いで映画館でメロンソーダ零したのは誰だったか…」

m「んな事してねえっ！」

哀「そういえばスノーボーでは哀ちゃんが運転すれば良いのにとか口走ったそうね。」

m「いやいや、んな事言っただけ。」

哀「馬鹿ね。私が運転したら作品バランス崩れるでしょ……犯人の銃弾かわしながら結局パンチして犯人捕まえちゃいましたなんて。」

m「え、え？」

哀「…冗談よ。」

・誕生日

哀「48月69日。」

m「何それ。」

哀「48月69日↓12月69日↓2月7日。」

m「いやいや、2月じゃないし…」

哀「チッ…」

m「何が!？」

・あなた地球人？

哀「そもそも人ではないわ。いわゆる『もの』ね。」

m「……タスケテ。」

哀「ほら、ものがしゃべっ……きゃああっ！」

m「……ヒド、イ……」

・生まれ変わったら？

哀「私に実験台としてこき使われる。ね、いいでしょ？」

m「……保険とかどうなるのかな……」

哀「めんどくさいからお姉ちゃんになっ……あ、ダメね。あなたがお姉ちゃんなんかの姿に変わったらお姉ちゃん傷付くから……」

・好きなアニメキャラは？

m「吉田歩美灰原哀宮野志保遠山和葉……」

哀「私より先にしゃべるなああああっ！」

『バキ、ボキ、グサッ』

哀「和葉ちゃんと哀たんを叫ぶただの変態だから気にしないほうが良いわ。」

・SM

哀「このやり取りを見てれば答えるまでも無いわね。」

m「哀ちゃんがSなだけだから……見捨てないで……」

・敵を作るタイプ？

哀「こんな奴敵に回すほど暇な人居ないわね。」

m「あれ……さつき……」

~~~~~

・敵

哀「睡魔、成績、体力、電気代、ガス代、水道代…」

m「俺独身じゃないからね、哀ちゃん。」

哀「馬鹿ね。あなたこの仮想世界飛び出したら周り敵しか居ないじゃない。」

m「…いや、そんな事…う…」

~~~~~

哀「え？何の事？」

m「あ、いや…なんでもないです。」

・嫌いなタイプの人？

哀「人付き合いだけ無駄に広いから多分無いわね。でしょ？」

m「まあ、一応…」

哀「好みは私みたいな…」

m「そうだね…」

哀「冷静で、クールで…」

m「うん…」

哀「ツンツンしてて…」

m「うん…」

哀「毒舌…」

m「うん…」

哀「けど突然たまに見せる仕草、行動が可愛いと…」

m「うん…」

哀「まあ、所謂ツンデレが…」

m「うん…」

哀「この糞筆者っ！抹殺よ！！勝手に私の事（ry」

く少々お休み下さい。ここからまだまだこの問答は続きます。現在は筆者もボコボコにされた全身を休めていますく

哀「では、再開よ。」

・メアド教えて？

哀「私と同じだったわよね。」

m「何故そうなる！？」

哀「そう、私はあなたのメールをいつでも見ているのよ…一瞬でも失言しようものならたちまち…」

m「怖い怖い！怖いって哀ちゃん！」

・怒った時に言う言葉は？

哀「怒っても何にもならない事を彼は熟知しているわ。なぜならあまりにも弱すぎて…フツ。」

m（哀ちゃんが強すぎるだけなんて…口が裂けても言えない……）

・今ほしい物は？

哀「私の人形。」

m「……」

哀「否定はしないのね？変態筆者さん。」

m「…まあ…」

哀「ちなみに吉田さんのと遠山さんのとどれが欲しい？」

m「………何、言っても言わなくても俺…死ぬの？」

哀「勿論じゃない…うふふふ…だって、私はあなたの事をいつ

でもどこでも殺しにいけるんだから…」

m「まさか！シールかつ！追跡眼鏡で捕まえるつもりだな！？」

哀「あら…気付かれちゃった。じゃあ今殺すわね。」

m「—うわあああああつ！！やめろっ！やめっ…」

『ボキ、グチャ』

哀「…そろそろ新しい効果音考えなきゃ…」

・会得したい技は？

哀「瞬間移動ね。」

m「…まあそうだなあ。移動が楽し…」

哀「意外ね…工藤君みたいに透ける眼鏡かと思ったわ。」

m「へ？」

哀「色を度々覗き見してるあの変態と同格かと…」

・サイヤ人の？

哀「スーパーゴスロリメイド、灰原哀！はあああつ…<sup>486</sup>シャーロツク波！」

m「ぐわああああああ（ry」

哀「…なんだか私もテンション可笑しいわね。今日は良く寝なきゃ…  
…ってまだ質問半分ちよつとしか終わってないじゃない！この糞筆者！」

m「いやいや、哀ちゃんのせいでしょ…」

・気合を入れる時の言葉は？

~~~~~日常風景~~~~~

哀「…APT X4869。」

m「よし！執筆だ！」

~~~~~

哀「—って私に言われることだけ。」

m（それじゃ自分で気合を入れる方法ないってことか…）

・喧嘩になつたら？

哀「じゃあ、私と喧嘩してみましようか。」

m「へ？」

哀「ちよつと！お母さんのテープ、勝手に4・869秒聞いたわね！？」

m「いやいや、そもそもアニメのシーンに……」

哀「許さないわ！mineなんか……死んじやいなさい！はあああつ……」

哀「スーパースロリメイド、灰原哀！はあああつ……<sup>486</sup>シャーロット波！」

m「ぐわあああああ（ry）」

哀「喧嘩になつても全く抵抗されないから楽だわ……」

・最近感じる事は？

哀「文章レベルの低下、成績の低下、持ち金の低下、運動能力の低下、水道代の上昇、ガス代の上昇……」

m「……なんか可笑しいな。」

哀「何が？」

m「いや、なんでもないよ。独り言。」

・頑張るには？

哀「『灰原哀』と48回呟き6回自分の頭で哀ちゃんを描く。このロリコン。変態。」

m「……それはないけどさ、その哀ちゃんが変態というコナンはどういうレベル？」

哀「彼は別格よ。史上最強の変態、シンイチって聞いた事あるでしょ？」

m「……知らない人には通じないネタだね。」

哀「まあ、そうね。」

・張り切るときは？

哀「私に耳元でA P T X 4 8 6 9を呟かれた時。」

m「解答例がマンネリだなこれ…」

哀「赤い彗星さんみたいに好きな奴なんて三次元で思い浮かべられないでしょ？」

m「…は、い…」

・目指すは？

哀「早く…人間になりたい、だったわよね。」

m「ものはやだね。人間にはなりたい…ね…」

・最近気になることは？

哀「私のスリーサイズ。」

m「死亡フラグ立ってきたな…」

哀「ロリコンのあなたには間違っても聞かないように言うておくけど、吉田さん自分のスリーサイズ知ってるわよ？」

m「え、え？」

・主にどんな話を書く？

哀「ネタか、コ哀か、新志。あと早く新蘭進めなさいよね。」

m「はい…」

哀「聞いてなかったわね！この糞筆者ああ…スーパ<sup>4869</sup>ーゴスロリメイド、灰原哀！はあああつ…シャ<sup>4869</sup>ーロック波！」

m「ぐわああああああ（ry）」

哀（もういいわね、これからお仕置きはこのループで…）

・ものを書き始めたのはいつ？

哀「なんだかものがものを書くって不思議ね。」

m「……」

哀「とりあえずひらがなを書き始めたのは最近よね。漢字も使えるようになるなんて、結構な成長速度じゃない。低レベルに見直したわ。」

m「…1年前に戻りたい…こんな調査報告書を始める前に…」

・同時進行で何本書ける？

哀「現在は勿論の如く1。全盛期は3以上だったのに…もうダメダメね。忙しくも無いくせに書ける時間に赤い丸と蒼い丸をタイミングよく叩いてコンボを繋ぎ得点を稼ぐゲームとかに手出して…」

m「知ってるの？」

哀「前吉田さんがやってたわ。あなたより上手いわよ？」

m「そ、それなりに自信あるけどなあ…どれぐらい？」

哀「片手で最難関曲をフルコンボ。」

m「それ全国最強ですけど!？」

・長編、短編好きなのは？

哀「次回作は短編連鎖型長編だったかしら？」

m「まあ、一応。」

哀「どっちも苦手だからとりあえずくつつけたのね。悪あがきご苦労様。」

m「……長編の方が得意、なのかなあ……」

哀「まあ精々頑張ることね。」

・因みに今まで何本書いたか？

哀「消したり二度としない事。こういう時数えられないんだから…いいわね。」

m「はい…」

哀「20ぐらいなのかしら…多分。」

・消し去りたい話はある？

哀「私は筆者の存在自体が消し去りたい物なんだけど、どうなの？」  
m「うーん……一個あるけど。それ消しちゃったら現実逃避だし……」

哀「まあ近い内に消えてるわね……」

m「が、頑張る……はず。」

・物書き中これだけははずせないという物は？

哀「空気、家、食べ物……」

m「それ物書きじゃなくても外せないでしょ。」

哀「あと、妄想ね。私の……（クスッ）」

m「え？」

・創作派？二次創作派？

哀「創作力0だから即二次行きのチケットを渡してあげたわ。」

m「……なんだかもう仕返しする余力も無いんだけど……」

・最大何ページ書いた？

哀「486・9。妥当じゃない？」

m「うーん……それくらいだよなあ。」

哀「4869になったら私がちゃんと抹殺してあげるからそれまでは死なないように頑張rinaさいよ。」

m「……」

・盗作に関して思うことは？

m「やつちゃいけないよね。まあ俺の盗作したってあんま価値ないけど……」

哀「今、盗作してるじゃない。」

m「いや、雛花さんのパクリじゃなくて……」

哀「まあ毎日犯罪を呼び寄せるスーパーマン工藤君よりはマシだけど……」

快「呼んだか？」

哀「ああ、あなたの父親もそんな名前だったわね。」

m「豪華だなあ……」

哀「何がよ。登場人物現在3人よ。」

・これから書きますか？

哀「いいえなんて答えたら……」

m「書きます！書きます！」

・疲れた？

哀「さあ、これからマラソンよ。基礎体力つけるんでしょ？」

m「やめてくれて……」

哀「じゃあ耐久力強化……はあああ……アポトキシ<sup>A P T X</sup>ン玉……！」

m「なんでそんなにドラゴンボールにぐわっぐっ（ry）」

……皆さんここまでお付き合いありがとうございます。

哀「じゃあ、質問編突入よ。」

m「もう、やめ、て……」

哀「最初は赤い彗星さんから。『朝は弱いですか？』そりやそうよね。」

m「う、うん……あ、あ、だ、か………あ、あ……」

哀「ふむふむ……とりあえず、今のを日本語に翻訳すると『起きられるけど二度寝するのが僕のポリシーですから』だそうよ。質問ありがとう赤い彗星さん……さて、次。雛花さんが本気出して色々質問考えてくれたからこれは最後にして、パウリの甥さん。『作家さん仲間で懂れる人物は？』………どうなのよ。早く答えなさいよ。文字数の無駄だから。」

m「あ、あ、あ……」

哀「……『長編が書ける人』だそうよ。もう筆者長編は書きたくないって何度も私に泣きついてるから気持ちには分かるわ。まあ助けはしないけど……質問ありがとうパウリの甥さん。さて、最後……雛花さんの質問ラッシュよ。」

m「……え、あ……」

哀「……私を知ってる範囲で答えるから寝てなさい。死に掛けて答えても気持ち悪いだけだから。」

・好きな人はいますか？

哀「居たらクリスマスのは執筆してる時間無かったはずだしツイッター上で叫んでたりはしないわね……雛花さんは彼とお幸……いえ、なんでもないわ。」

・そういえば、何部ですか？

哀「ソフトボール部。男子はチーム数が少ないとかいう不純な動機だったはずよ……まあそれは冗談としてとりあえず運動したかっただけじゃないかしら。」

・将来の夢とかありますか？

哀「私の実験台。」

哀「いえ、冗談よ。まだ決まってる……プログラマーになりたいとかなんか言ってた頃もあるらしいけどね。」

・やっぱり、頭良いんですか？

哀「彼が頭良いつてレベルなら日本は学力低下とか騒がれないわね。中学入試受かったとかで舞い上がった頃もあるけどただ暗算が少し得意だったから算数の成績が良かっただけよ。数学になったら成

績低下しちゃったし第一古文と英語で削られまくってるから結論、ボロボロね。平均ラインの上下を彷徨ってるわ。」

・文章書くときに気をつけていることとかありますか？

哀「気をつけるだけの集中力は彼にな……いと思うけど、最近よく呼称間違えるらしいから、色々困って修正したりしてるわ。見つけたら出来たら、教えてあげて頂戴ね……あ、あとここでの私の他の人への呼称は報告しなくても結構よ。私が発狂してるだけだから……な〜んてね。」

・趣味教えてください！

哀「筆者は音ゲーやって暗算の練習してパソコンいじくってるだけね。もっと真面目に暮らさないって……」

・m離ってどう思います？

哀「良いんじゃない？私の負担減るし……でも自分自体が癖が強くて面倒だつて本人が言ってるわよ？大丈夫かしら……まあ何かあったらいつでも言って頂戴ね。この報告書でいつでも公開処刑にするから……」

…ふう、終了よ。

とりあえず、これからこんな筆者をよろしくね？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7011r/>

---

灰原哀による調査報告書

2012年1月9日19時52分発行